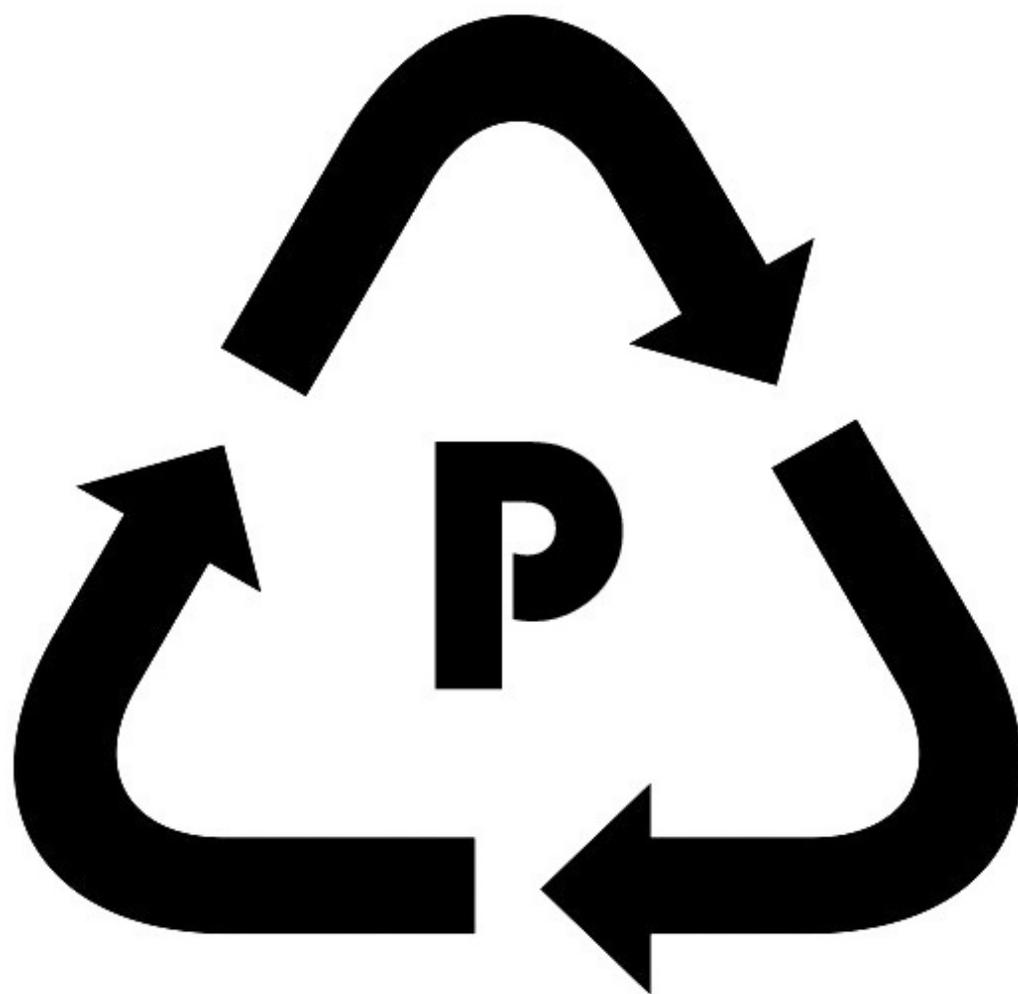


CYCLE - P



道玄坂杏子

たぶんかなり長い間、筒は筒としての意識を持っていなかった。

たぶんというのは、思い出せる限りさかのぼってみても、意識があったような気がするのはいざい一分ほど前からで、その一分と言う単位も正確なのかわからない。筒はそれ以前の自分というものを思い出せなかった。自分ではなく、何か他のものといっしょくたにしてあったらしいということはおぼろげながらわかるのだが、それさえも今の自分の筒らしさから考えればまったく取るに足らないことだった。もしかしたらそれ以前の起源もあるのかもしれない、ともあれ筒としての起源はおよそ一分前、いやもう少し前だったかもしれない、から始まった。

筒は改めて自分を見直してみた。自分というよりも、自分たちと言った方がよかった。前後左右に、同じ筒たちがひしめきあっている。どれをみても同じだった。違うのはどのパルプから生まれたかということだけで、それについても限りなく差異のないものであったので、筒は自分とその他の筒を区別するのを早々に止めた。そういうわけで、筒は自分たちを改めて見直してみた。自分たちは緑色の衣装を着ていた。その衣装には白と黒と青で模様が描いてある。模様はいずれも同じくらいの大きさで、妙に角ばっており、自分たちの丸みとはそぐわないという印象を筒は抱いた。

筒は次第に、とはいっても数瞬の後に、あることに気づいた。われわれは位置を変えている。ひしめきあい、互いに僅かずつこすれあいながら、一方で全体として、そう全体として、進んでいる、というのがその気づきだった。そこに至ってようやく筒は、自分たちとは異なるもの、黒かったり銀色だったりする非常に巨大なもの、の中に自分たちが位置しているということを知った。それらは重々しく、筒のようにあらゆるものが互いに同じ形ではなく、しきりに動き喚き立てている。筒にはその喚きが理解できなかった。筒には筒のことしかわからない。ともあれ、自分たちがその黒く大きなものに取り囲まれ、その中で自分たちが全体としてある方向へ向かっているという事実を筒は大急ぎでまとめた。

筒の気づきは、初めて筒が筒として意識をもってから絶え間なく連鎖し続けており、そのせいで膨大な量にのぼった。筒はいまや、自分たちがある巨大なひとつの流れの中にいるということを知っている。そして前方、自分たちが流れて行く方向のことをそう呼ぶことにした、ではまさにこの瞬間もある異変が起こっている。筒は全体としての数を一定に保ちながらも、筒とは少しだけ異なるものの手前に自分たちがいる、ということを知った。つまり、自分たちを取り巻くあの全体的に銀色の巨大な塊の一部を境にして、自分たちが次々に自分たちとは異なるものへと変わっている。そこで生まれるのは相変わらず筒ではあった。だが、それまで筒にはなかったきらめきを放っていた。

## 円環

---

円環は筒と出会った。出会ったと思ったら、次の瞬間円環は筒の一部であった。円環と筒は出会いを喜ぶ暇も嘆く暇もなくひとつになった。それはあまりに唐突だったので、ほとんど事故のようなものだった。円環は円環として存在できたその数十秒を振り返る余裕さえなかった。

## 紙の円

---

筒はいま、少し前までとは違う風に自分を感じている。自分の頭、空気に触れている方を筒はそう呼ぶことにした、にきらきら光る円環がくっついている。くっついているというより、もはやそれは筒の一部だった。円環は、筒の前に現れたと思った瞬間筒の上に載っていた。おかげで筒はそれが上だと言うことを知った。

少し強くなった筒は、巨大な塊が自分たちを行儀よく整列させていくのを見守っている。筒は円環との出会い、統合を通じて、自分たちが次に会うもののことを考えた。それは円環との出会いからもう間もなく訪れる。

円環と同様に、紙の円もまた自分の存在を反省する間を与えられなかった。紙の円は、自分の重さを感じる暇さえなかった。ただ、自分が完全な円ではないということと、その飛び出した部分の曲線の必然性について思いを馳せただけだ。気付いた時には紙の円は筒の上に行儀よくくっついている円環の上に自らが接着されようとしていた。もしかしたら最後の意識の中で、紙の円は円環のきらきらひかる腹と自分の腹がくっつくのを感じたかもしれない。

## 帽子（プラスチックの）

---

プラスチックの帽子は目ざめたときから完璧にプラスチックとしての、そして帽子としての意識を持っている。われわれは帽子である。帽子は自分たちのアイデンティティの揺らがないさを誇りにしていた。それはあの筒のような、曖昧な存在とは比べ物にならない明瞭さである。なによりも、帽子は自分とプラスチックとの差異について思いを馳せる必要がなかった。帽子は最初からプラスチックとしてあり、同時に、帽子だった。

その頃筒は、円環と紙の円との出会いを通じて、筒としての存在を増しながらも、一方では変化の速度に置いていかれまいと必死になっていた。

筒には今や、ある容量があった。それは紙の円を自らに取り込むことで起こった新しい変化だった。自分の内部に空間があり、そこに空気が出入りしている。その空間は、紙の円と出会うよりずっと前から筒の一部だったはずなのに、紙の円と出会ってから始まったように思えた。筒は自分たちが次に会うもののことを考え、そして見た。そこにはプラスチックの帽子が筒と同じように膨大に整列している。

帽子との出会いは、筒にとって新鮮な驚きだった。筒は、自分たちとは異なるものと一緒にいる、ということを経験したのだ。円環も、紙の円も、出会った瞬間には筒の一部であった。それらは今では筒であり、見分けるのは難しかった。だが帽子は、帽子として筒と出会い、筒になることなく帽子として存在し続けている。帽子たちは筒の上で押し黙っているが、その強い主張ははっきりと読みとれた。帽子は筒と違っていた。筒はパルプからできていたが、帽子はプラスチックからできていた。できていたというより、プラスチックそのものだった。帽子はプラスチックであり、プラスチックは帽子であった。筒は、その純粋な有様に少し憧れた。だがその数瞬後に、その憧れを吹き飛ばす事態が起こることを筒は知らない。なぜなら、筒の視界の外でことは起こっていたし、筒はその全体として、それを知るのが難しい位置にいた。

## 小片

---

ほとんどがでんぷん質でできた数十グラムの瘤、栄養の塊、暗く湿った土の中で過ごした穏やかな日々のことを、小片はときどき、発作のように思い出すことがある。小片にとって、かつて自分たちがそうであった、あの小さく武骨な実のことを思い出すのは幸せな時間だった。だがその記憶はほとんどが断片的でしかない。というのも、小片は一度、自分でもどこまでが自分なのかわからなくなるくらい粉々にすり潰されたからだ。宇宙のような状態だった、と小片は考えた。そこにはありとあらゆる自分たちの元となるものが存在し、自分たちはそこから生まれた。

小片は、小片になる前はたった一枚の巨大な板だった。宇宙の次に小片の起源が突入した次元だ。限りなく二次元的ではあったが、僅かな厚みを持っていた。巨大な鉄の上で均一に敷き伸ばされ、小片となるのを待っていた。順番に、自分が小片となっていくのを感じながらも、板は、小片とならなかった自分の一部がどこへ行くのか知らなかった。板は小片が自分から離れていったあとは、ただの穴であったし、穴は自分がなんであるかということを考えることはできなかった。穴の周囲に僅かに断片が残されてはいたが、断片はすでに板としての意識を持っていなかった。小片が生まれた後では、だから、板はすでに存在しなかった。

小片は、存在を始めてすぐに多くの粉末と一体化し、揺りかごに載せられたまま猛烈な温度の中を通過した。全身があっというまに燃え上がるような気がした。すべてが終わると、緩やかな曲線を描いた小片は再び鉄板の上に並んで長い行列を作っている。小片は自分たちが互いに同じでありながら、少しずつ異なっていることを肌で感じた。小片の中に含まれているものは、ほとんど同じだった。自分たちを作り上げたものが、自分たちを同じにしている。だが、それにもかかわらず少しずつ異なっている。小片は自分の前と後ろに僅かな空間を残して重なり合う別の小片を見た。はるか向こう側には、何かの衝撃で半分に割れてしまっている小片もいた。仕方のないことだ。彼は巨大な機械の間に立つ、柔らかい指に持ちあげられ、小片の視界から消えて行った。

その時、小片は自分たちのはるか前方に、黒々とした円が口を開けているのを知った。整列した小片は、勢いよくその円の中へ飛び込んでいく。円の中はとても暗く、乾燥しており、小片は折り重なりながらそこに僅かに残された空間を捉えて身震いした。小片はそれ以上前に進むことはなかった。やがて後ろで最後の小片が入るやいなや、あたりはまっくらになった。

筒は一瞬、何が起こったのかわからなかった。プラスチックの帽子と感動的な出会いを果たした直後、筒の上下は入れ替わっていた。帽子を被っているほうが銀色の機械に接触し、ぽかりと空いた空間が、大気にさらされることになったのだ。どちらが上でも筒にとっては大した問題ではなかったが、その後に起こったことはさらに混迷を極めた。

筒は、自分の空間にクリーム色をした大量の小片が、否応なしに詰め込まれるのを感じた。まさに否応なしだった。それまでも筒は否応なしに以前は異なる物体だったはずのものとひとつにならざるをえなかったが、今度は完全に別の、それはおそらく帽子のような別物感とはまた別の、様相をなしていた。筒は、自分の内部を感じた。銀色にコーティングされた内部を感じた。そこにあっという間に詰め込まれた小片の、ごつごつとした肌触りを感じた。小片はさざめきあいながら筒の内部に収まると、その内部空間について考察を始めた。だが、その考察が十分になされる前に、筒の解放された空間は、唐突に閉じることになった。筒はそこで何かが完全に終わったと思う。筒は、変らず筒ではあったが、自分の意識がもう、純粋な筒ではないとも感じた。意識は複合的になっていた。複合的で、総合的で、複雑だった。筒は、筒としてのアイデンティティを手放すべきだった。筒は筒ではない何か、製品へとその意識を譲ることにする。筒はようやく役目を終えた気がして、安らかな心持だった。

## 出荷

---

気がつくとも製品は、うす暗い箱の中でゆすられていた。工場の中とは違う、さまざまな音があふれていた。今は低く唸るような音、それから時折甲高い動物が泣くような音が聞こえた。その音が聞こえるたびに揺れが一旦止み、少し前に投げ出されるような気がした。

製品は自分たちの歴史の中で、今が特殊な時期に当たることを理解している。筒としての意識を脱してから、そのことをずっと考えていた。今の自分が置かれた特殊な状況を、何かのきっかけでこれまでとは区別したい。

そこで、製品は名前をつけることにした。ときどき現れた奇妙なバランスの生物が、自分たちのことを呼ぶ音を思い出す。破裂音だ。また自分たちの身に付けた衣装にある、曲線と直線が絶妙に組み合わせあった模様、「P」を思いだした。製品はその名で自分たちを呼ぶことにした。

揺れは止んだり、また再開したりしなげらずっと続いた。Pはその揺れと、これから行く場所のことを考える。自分の腹の中では小片たちがゆったりとしたまどろみに身を任せていた。小片のことを思うと、Pはなぜか穏やかな気持ちになる。自分の全身が、小片をきちんと守り、他の空間から区切り、乾燥状態を保っているのを誇りに思う。Pは自分たちがどこへ行こうと、最後の瞬間まで小片を守り続けることに決めた。小片もまた、Pの一部だったからだ。

周期的に明るくなったり暗くなったりする蛍光灯の下で、Pは他の製品たちと一緒に狭いところに押し込まれている。驚いたことに、自分たちとは違う製品が、上下左右にひしめきあってあるグループをつくっていた。Pのいる棚の向いには、角ばった黒っぽい製品たちが並んでいる。やけに薄っぺらいビニール袋もその下に並んでいる。Pはそれらの腹の中に何が収まっているのか考えた。自分のように、美しい曲線をもつ小片たちだろうか。それとも、異なる何かだろうか。その想像はPを楽しい気持ちにさせた。Pは、製品たちがみな仲間であるような気がした。姿かたちは違っていたが、彼らはみな、自分と同じように、どこかで生まれ、ここへやってきたのだろう。これからどこへ行くのかは誰も知らないようだったが、Pは確かに満足した。腹の中でささやきあう小片たちに、まだ眠っていてもいいと伝え、自分もまた眠ることにした。眠るというのは、Pが最近覚えたことだ。Pはときどき、自分のことを忘れていた。そのことを、眠ると名づけた。

奇妙なバランスの生物、彼らは製品たちとは明らかに違っていた。柔らかく、温かく、ばらばらの形をしている。そしてしばしば棚に並んだ製品たちを取り上げ、黄緑や黄色や赤いかごのなかに放り込んだ。Pは、まだ筒だった頃に一度だけ彼らを見たのを思い出した。そのとき彼らは真っ白だった。そして筒のひとつを取り出し、どこかへ連れて行った。小片が、それにさざめきながら同意した。小片もまた、自分の割れてしまったひとつが彼らの手で取り上げられ視界から消えたのを覚えていたのだ。Pは、ここにくるまで一度もその意味を考えたことがなかった。彼らは果たしてどこへいったのか。あの生物は、自分の仲間をどこへ連れて行ったのか。

そこまで考えて、Pは慄然とした。自分の仲間の運命は、やがて自分にもやってくる道である。あの工場で洪水のように訪れる気づきの中で筒として意識をもってから、自分たちが一度たりと違う道をたどったことはなかったのを、Pは思い出した。製品たちはぽつぽつと現れる生物の手で取り上げられ、どこかへ連れて行かれる。自分もまたそうなるのだろう。そのときPは未来について考えようとしていたのだが、そのことにP自身は気づいていなかった。ただ、自分は何があらうと腹の中の小片を守ってやらねばならないと、そう考えたのだ。

Pを取り上げた手の持ち主は、いつも見る生物の半分くらいの大きさで、やたらと甲高い声で喚きたてるのが得意だった。Pはようやく慣れた棚に別れを告げる。残された仲間が自分のことを見ているような気がしたが、そういえば仲間が自分をどう見ていたのか、Pは知らない。小さな生物の横にはいつも見る大きさの生物がいて、小さな生物からPを片手で取り上げると、オレンジのかごに放り込んだ。Pは、自分のまよっている青が気に入っていたので、オレンジのかごは好きになれなかった。

かごの中には先客がいた。濃い緑色のみずっぽい、ごつごつとした製品が、透明なビニール袋の中に見える。Pは自分と同じく「P」が印字された透明なビニールには親近感を覚えしたが、腹の中に収めた緑色のやつとは、どうも仲良くなれそうになかった。彼ら、全部で五つ入っていた、はこのかごをぶらさげている生物のように不揃いで、それぞれが別物のようだった。Pのように、同じ顔をした仲間たちではなく、ただ、たまたま同じビニール袋に放り込まれただけ、という顔をしていた。無口で、無愛想だった。Pの後からは、四角く冷たい製品たちがいくつか入ってきた。筒と同じようにパルプからできた彼らは、腹の中に冷たいものを入れているのだ。Pは彼らが表面につけている湿り気を嫌った。腹の中にある小片にとって、湿り気はなによりも忌避したい。Pはできるだけ彼らから遠いところに位置を保とうとしたが、Pはそういう能力を欠いていることに気づいた。どうやらPは、自分で動くことができないのだった。

透明なガラスの上で真っ赤なレーザーを通過したとき、Pは自分の何かが変わった気がした。かごではなく布製のバッグの中で、Pは他の製品たちと一緒に、再び運ばれていくのを待っている。Pはいつも、運ばれるだけだ。

## 廃棄

---

Pは自分が何者かということについて、詳しく考えたことはなかった。筒として意識を持ってからも、そして筒としての意識が製品としての意識を経て、今のPになるまで、すべては勝手に流れた。自分たちがあの巨大な鉄の塊の中でうごめいているときから、今、こうして木製の台の上に落ち着くまで、すべてがPの意志とは関わりのないところで進んでいった。

そもそも、Pには意志と呼べるものはない。PはPであって、それ以上でも、それ以下でもない。腹の中の小片だけが、唯一意志の片りんを感じさせた。Pは小片を守り続けることが、自らの役割だとよく知っていたのだ。

やがてじっとしているPのところへ小さな生物がやってきて、小さな手でPの帽子をはぎ取った。プラスチック製の、完璧な純粋さをもった帽子はあっというまにPとは別のものになった。続いて、紙の円が剥がされた。Pは自分の一部があまりに唐突に消えたために、戸惑っていた。自分の一部がなくなったのか、自分が自分ではなくなったのか、よくわからなかったのだ。

円環を上にして内部を晒しながら、Pは大量の大気が自分の中に押し入って来るのを感じた。Pは内部にいたはずの小片たちのことを気遣った。ここまでは、小片たちはひとつも欠けることなく、美しい曲線を保つことができた。曲線は調和していた。ここからは、どうなるのだろう。Pはそれ以上のことを知らなかった。大気にさらされた小片たちに、Pは何を伝えたらいいのかわからない。

Pは内部から少しずつ小片たちが消えて行くのを感じた。ひとつ、またひとつと小片たちは柔らかな手によって消えて行った。そうしてPがしっかりと守り抜いた小片たちが消えて行くにつれ、Pは自分自身が曖昧になっているのに気付いた。Pはいつの間にか製品としてではなく、また、あの筒に戻ろうとしていた。内部の空間は、懐かしい空虚をたたえはじめている。Pは薄れていく統合的な意識の中で、かつて自分が完全なる円筒であり、空洞であり、純粋であったことを思い出した。またあの、単純な意識に戻ることができると思うと、嬉しくさえあった。Pはいまの自分がPなのか、それとも筒なのか曖昧に思いつつ、過程を楽しんだ。小片はもはや、守るべき何かではなく、完全にPとは別のものになり、それに気づいた時、同時にPは自分がもはや、Pではないことにも気づいたのだった。

そしてPが意識を完全に筒に譲る前に、あの小さな生物は、Pの美しく曲がった円筒状の全身を、渾身の力を込めて押しつぶした。

筒は自分が以前の筒ではないことを知っていた。かつて見分けがつかないほど同じであった自分たちの体とは、今はもう違っていた。あちらこちらがつぶれたり出っ張ったりし、一部はパルプが裂けてちぎれていた。円環や、紙の円や、帽子や、自分を支えた底部のアルミ、そして唐突に自分に押し入ってきた異物の小片たち、そういった色々はもはやどこにもなかった。ただ、周囲には筒と同じ、もともとパルプであった何かがひしめきあっている。それらはパルプであったというだけで、筒とは似ても似つかなかったが、筒もまた、自分が以前の筒とは似ても似つかないことを知っていたので、気にしなかった。

やがて筒は、自分がどんどん小さくなっていくのに気づいた。どんどん小さくなって、どんどん筒ではなくなった。筒は広がった板状の何かになり、続いて周囲がどんどん水に溶けて、他のパルプたちと見分けがつかなくなっていった。まったくの誤解だったかもしれないが、筒はそのどろどろに溶けた自分たちの姿を懐かしいと思った。だが思ったときにはもう、筒は筒ではなかったのだから、それはたぶん、どろどろに溶けたものの意識であったに違いない。溶けあったパルプの中で、微かにあくびをしながら、かつてPがそう呼んだもの、眠りの中に入って行く。色は消え、やがて音も消えた。もう、みんないない。

## CYCLE - P

<http://p.booklog.jp/book/25532>

著者：道玄坂杏子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/dogenzakakyoko/profile>

twitter：<http://twitter.com/dogenzakakyoko>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/25532>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/25532>

お手に取っていただけて幸いです。

ありがとうございます。